余市協会病院広報誌

発行：はつらつ編集局
発行日：平成 26 年 9 月 1 日
発行人：吉田　秀明
編集人：はつらつ編集委員
お問い合わせ：0135-23-3126

はつらつ Vol.123

研修医リレーコラム64 「アルコール性肝障害」

こんにちは。斗南病院　研修医の吉田　朋世です。8月に余市協会病院で働かせて頂きました。大変勉強になりました。上級医の先生方、様々な医療スタッフの皆様には感謝申し上げます。さて、今回はアルコール性肝障害に絞って書かせて頂きます。

〈肝臓について〉

1、肝臓に出入りする血管

・肝動脈：肝臓が仕事をするための酸素を送る。

・肝静脈：肝臓から心臓に戻る帰り道の血管。

・門脈　：消化管からやってきて、胃・腸で消化され取り込まれた栄養素を肝臓に運んでいる。

2、肝臓の働き

・門脈から運ばれてきたアミノ酸、炭水化物、脂肪、ビタミンを体が利用できる形に直す。

・胆汁の生成：主に脂肪の消化吸収に関わる。

・赤血球のリサイクル：古くなった赤血球は脾臓で壊され、ビリルビンという黄色い物質になる。肝臓はこれを受け取り胆汁として再利用する。

・有害物の処理：門脈から運ばれてきた毒物や薬物を分解し、安全な形にして排出する。アルコールの分解処理もこの一つ。アルコールは肝臓でアセトアルデヒドに分解され、更に酢酸に変わる。酢酸は二酸化炭素と水になり、尿や汗として排出される。アセトアルデヒドは毒性が強く肝細胞を破壊する。

〈肝障害について〉

・脂肪肝：肝臓はアルコールの様な毒物を分解するのを優先させるため脂肪の分解が後回しになり肝臓に脂肪が溜まり脂肪肝になる。禁酒すると治癒する確率が高い。

・肝硬変：慢性的な飲酒により、アルコール性肝線維症→アルコール性肝硬変となる。肝細胞癌になる事もある。

（大量飲酒が続くと肝細胞が一気に破壊され、突然の倦怠感、腹水貯留、黄疸の出現。劇症肝炎になることもある。）

※そもそも肝硬変とは…その名の通り、肝臓が硬く変わる。つまり、肝臓の細胞がコラーゲンという繊維に置き換わるため硬くなる。硬くなると血液が通れない。

→門脈から肝静脈を通って心臓へ返るルートが通行不能になる。

→行き場を失った門脈の血流は、門脈を逆流し、胃や食道の血管を通って心臓に戻る。

→門脈は肝細胞に栄養素を送れず、肝細胞の働きは落ちる。

→肝臓で身体に必要な栄養素が作れなくなり、栄養失調になる。

（例えば、タンパク質の主な成分であるアルブミンが作れなくなり、血管内に水分を貯めておくことが出来なくなる。そうなると、血管外に水がもれ、腹部などに水が貯まる、いわゆる腹水が貯まる。）

・黄疸：古くなり脾臓で壊された赤血球はビリルビンになるが、これを肝臓が受け取れず、血管内を循環するため黄疸という体が黄色くなる症状がでる。

・肝性脳症：アンモニアの処理が出来なくなり、血液中をアンモニアが循環し肝性脳症を起こす。異常行動や意識の混濁、さらに昏睡状態に陥り、亡くなることもある。

簡単ですが、アルコール性肝障害について述べさせて頂きました。皆さん、飲み過ぎには注意しましょう。機会があればその他の臓器障害についても書かせて頂きたいと思います。　**斗南病院　研修医の吉田　朋世**

余市協会病院祭り

18：30～　紙切り芸
19：15～　花火

どうぞ
ごゆっくりお楽しみください。

9月12日（金）
1階　待合ロビー

地域医療国際支援セミナー

『世界と日本の被災地で人間のチカラ、地域のチカラ』

2014 年 7 月 30 日、余市病院において米田哲医師による講演会が開催されました。途上国・被災地・地域医療の現場での経験から見えてくるもの、感じたことについてご講演頂きました。当日は、余市病院職員の参加に加えて、地域の方々にもお越し頂きました。また、講演会のために札幌からお越しになった研修医の先生もおり、講演後も米田先生との親睦を深めておりました。　米田先生、貴重なお話をありがとうございました。

救急件数（8月）　外来受診317件　うち入院75件　救急車来院113件　うち入院59件